

マクロモデルによる財政投融資の経済効果に関する理論・実証分析

慶応義塾大学 吉野直行

慶応義塾大学大学院 中田真佐男

現状の財政投融資制度は、2001年4月から抜本的に改められることになっている。本論文の目的は、財政投融資制度の変革が、わが国のマクロ的な資金循環および実物経済に対してどのような影響を及ぼすかを理論的に分析し、そのシミュレーションを行うことである。

これまで財政投融資は、基幹産業に対する長期資金の融資（いわゆる政策金融）や高速道路網などの社会資本整備、住宅融資などの分野に振り向けられてきた。ただし、近年は、財政投融資に対して、民業の圧迫（民間金融機関の融資分野との競合）、効率性の低下（資金の有償性を無視した、低採算事業への資金供給）などの批判が高まっている。

1980年代以降、民間部門の資金不足の解消や社会インフラ整備の進展により、財政投融資の役割は、（特に景気後退期における）中小企業への信用補完などにシフトしつつある。従来型の財政投融資制度は、運用先の収益性との整合性がなく、原資である郵便貯金や簡易保険の規模だけが拡大してきたことに問題がある。このため、2001年4月からの新しい財投制度のもとでは、財投資金の入り口と出口のミスマッチを解消するため、以下の点が変更される。

- (a) 資金運用部を廃止し、郵便貯金・簡易保険・厚生年金が資金を自主運用する。
- (b) 資金運用部の廃止後、財政投融資関連の諸機関は、財投債（国債と同一）（政府保証のない）財投機関債、政府保証債のいずれかを発行して資金を調達する。

本論文における分析の第1の特徴は、2001年4月からの新しい財政投融資の仕組みを明示的に考慮したオープンマクロモデルを構築し、財政投融資制度の改革が国際的な資金フローに与える影響も含めた理論分析を行うことである。また、第2の特徴は、マクロ計量モデルのシミュレーションを実施し、財政投融資制度改革がマクロ経済に及ぼす影響に関する定量的な分析を試みることである。

《参考文献》

吉野直行・中田真佐男（1999）「平成不況期における設備投資の低迷と財投融資の投資誘導効果」、慶応義塾大学経済学会ディスカッション・ペーパー（KES DP No.9901）

吉野直行・中田真佐男・中東雅樹（1999）「社会資本の分野別生産力効果と公共投資シミュレーション」、小野善康・吉川洋編、『経済政策の正しい考え方』東洋経済新報社

吉野直行（1998）、「財政投融資の入口と出口の役割とその将来」、深尾光洋・岩田一政編『財政投融資の経済分析』日本経済新聞社